

研究論文

日本人の留学先としてのマレーシア (先進国から新興国への学位取得を目的とした国際移動)

金子(藤本) 聖子^A

Malaysia as a Study-Abroad Destination for Japanese Students (International Mobility for Degree Acquisition from a Developed to an Emerging Country)

Seiko FUJIMOTO-KANEKO^A

Abstract: Today, an ever-increasing number of students—including Japanese students—choose Malaysia as their study-abroad destination for degree acquisition. However, research on international students' mobility from developed to emerging countries has been inadequate. In this study, the educational experience and transition from education to work of Japanese students in Malaysia were examined qualitatively and analyzed using the SCAT analysis. This research revealed a new paradigm of international students' mobility from “central” to “peripheral” countries; “escape” or “drop out” students—a type common among Japanese students in Western countries—were not found in this study. Instead, the characteristics of education in Malaysia, peripheral perception of non-Western education, existence of different language worlds, and an outlook of transition from education to work have been revealed, which differentiate education in Malaysia from other higher-education destinations. The findings are beneficial for Japanese high-schools and universities that send students abroad, especially in the post-COVID-19 era, where it is difficult for students to go to countries with high tuition and living costs.

Keywords: international student mobility, degree-seeking, Malaysia, SCAT analysis

キーワード: 国際留学生移動、学位取得型留学、マレーシア、SCAT分析

1 はじめに

世界各国で留学生数が増加しているが、留学生の大半は欧米を中心とした先進国で学んでおり、アメリカ、イギリス、オーストラリア、フランス、ドイツの5カ国で全留学生の約半数を受け入れている¹⁾。アルトバック(1994)は、従属論・新植民地主義論の視点から、高等教育に関して「中心-周辺」(center-periphery)理論を提唱し、中心的な大学は例外なく高い経済水準にある主要国に位置しており、他方で周辺の大学は全てではないものの周辺国家に位置しているとした²⁾。国際留学生移動の多くは周辺の国から中心的な国に向かって起こって

いると言えよう。

しかしながら近年、留学先は多様化しており、2004年と2010年を比較すると、上位5カ国の顔ぶれは変わらないものの、そのシェアは62.6%から50.6%に減少している^{1,3)}。欧米先進諸国に代わって、中国、韓国、マレーシア等のアジア諸国が受け入れ数を伸ばしている。

本研究では、英語による教育の普及や安価な学費・生活費といった強みから、欧米先進国と並ぶ形で留学先に選ばれているマレーシアに焦点を当てる。マレーシアで受け入れる留学生の多くは、南アジア、中東、アフリカ諸国等、他の開発途上国(以下、途上国)出身である。ただ、UNESCOによれば、マレーシアの受け入れ留学生の中で、出身国上

A: 東洋大学国際学部

位30カ国において唯一、先進国として日本が21位に入り、その数は500名近い⁴⁾。また、UNESCOの統計とは齟齬があるものの、マレーシア高等教育省の統計においても、2019年に私立高等教育機関だけで592名もの日本人が学んでおり、全体の20位に位置している¹¹⁾⁵⁾。日本側から見た送り出し先という観点からも、アメリカが約半数を占めているものの、1.6%の日本人がマレーシアを留学先として選んでおり、送り出し先の第9位となっている⁴⁾。「中心」的な国から「周辺」的な国へと、人材の逆向きの流れも起きてきていると言えよう¹²⁾。

2 先行研究と研究目的

従来、留学生移動の典型的なパターンは、主に途上国から先進国に留学する「先進文明吸収型」「学位取得型」、逆に先進国から途上国へ留学する「地域研究型」「異文化理解型」⁶⁾、相互理解に主眼を置いた「共同体理解型」⁷⁾等に分類されてきた。しかしながら上述のとおり、これらの類型とは異なり、学位取得を目的として新興国に渡る日本人学生が現れてきている。

日本政府は、日本人留学生数を年間12万人に増加させる目標を掲げている。日本学生支援機構(JASSO)の日本人学生留学状況調査結果⁸⁾によれば、2018年度の日本人留学生数は11万人を超えているものの、8割以上が半年未満の短期留学(多くは1ヵ月未満)であり、1年以上の留学となると全体の2%にも満たない。学生の内向き志向が強調されがちだが、海外留学に対する雇用者の低評価、就職活動時期との兼ね合いの難しさ、また海外の大学の学費高騰等、外部の要因も指摘されており⁹⁾、日本人をいかに海外へ送り出すかということは、日本の教育機関にとって大きな課題となっている。短期留学・研修であっても、視野の拡大や国際感覚の涵養、異なる価値や考え方の受容等については効果がある。しかしながら、語学力やコミュニケーション能力、学業・進路面での効果は、短期では限定的である¹⁰⁾。

一方で、日本人学生の学位取得型の留学移動に関する研究としては、その多くがアメリカ、イギリス、オーストラリア等の伝統的な留学先を対象としている。学問やキャリアの追及を目的とする者が少

なく、日本社会に不適應を感じて留学を選んだ「現状脱出型」や「ドロップアウト型」が増えており¹¹⁾、男性に多い「さまよい型」、女性に多い「逃避型」¹²⁾も論じられている。これらの類型が新興国への留学の場合にも当てはまるかどうかは分かっていない。星野(2015)は、近年増えている学位取得目的の東南アジア留学者を除外して議論してはいるものの、日本人の東南アジア留学の特徴を日本学生支援機構(JASSO)の統計を用いて分析している¹³⁾。1ヵ月未満の滞在を中心とした東南アジア留学の位置づけを、(1)訪問・体験型、(2)長期留学を見据えたステップアップ型、(3)北米等留学の妥協案としての譲歩型と論じている。

マーフィー＝ルジューン(2002)は留学生移動にナラティブ・インタビューを適用しているが、先述の「共同体理解型」留学の代表格である「エラスムス計画」(EU域内の学生を対象に交換留学を支援する資金助成制度)による短期留学生を対象にしており、文化適応に関する記述が大部分を占める¹⁴⁾。学業や進路に関する側面が十分に検討されているとはいえない。また、留学終了後の進路に焦点を当てた研究は多数なされているが、その大半は、留学先での永住権取得の可否に偏りがある¹⁵⁻¹⁷⁾。マレーシアで学ぶ留学生の移動類型については、欧米諸国等永住権志向型、研究志向型等が論じられている¹⁸⁾が、先進国からの留学生は必ずしもこの範疇に収まらない可能性がある。

以上のことから、先行研究の課題は次のようにまとめられる。先進国から途上国や新興国への学位取得を目的とした留学生移動を想定していないことによって、留学修了後の進路に関する研究が、主に途上国出身学生の先進国における永住権取得のプロセスに偏っている。また、日本人学生の学位取得留学に関する研究についても先進国留学への偏りがあり、東南アジアについては短期留学のみが検討され、長期の学びで得られる留学の成果が十分に考慮されているとは言えない。

しかし留学先にかかわらず、取得した学位や留学経験はキャリアやその後の人生に生きることになる。このため本研究では、これまで先行研究で十分に検討されてこなかった、日本から新興国マレーシアへの学位取得を目的とした留学に焦点を当て、特

に留学経験および教育から職業への移行を質的に説明する。ただし、本研究は予備的な位置付けであり、広く調査を行う前に、少数ではあるものの、まずは実際に学位取得のためにマレーシア留学中の日本人学生及び受け入れ側の大学職員にナラティブ・インタビューを実施する。その結果をSteps for Coding and Theorization (以下: SCAT) で分析することによって、日本人のマレーシア留学の特徴を明らかにし、先進国から新興国への学位取得留学という新たな潮流の一端をとらえることを目指す。

3 マレーシアの高等教育機関

1957年に独立を果たした、主にマレー系、中華系、インド系からなる多民族国家マレーシアは、かつてファーンバル(1939)が「複合社会」と評した、各エスニック・グループが隣り合わせで生活しながら、お互いに交じり合うことのない社会であった¹⁹⁾。このモザイク状の社会における国民統合と経済発展を課題として、高等教育は長い間、一部のエリートを対象に非常に限られた数の国立大学のみで行われていた。さらに1970年代からは、経済的に後れを取る多数派・先住のマレー系を優遇するブミプトラ政策によって、マレー語とイスラム教を軸とする国民教育政策がとられるようになった。

この状況下で、英語を教授言語とする高等教育機関は認められなかったが、ブミプトラ政策によって国内の大学に進みづらマイノリティのために、海外留学を目指す塾のような役割で始まった教室が、後に海外(主に欧米諸国)の大学の通信教育や学位プログラムの一部を担うようになった²⁰⁾。今日マレーシアに存在する民間²¹⁾の高等教育機関の一部はこのような起源を持つ。

1980年代に経済発展が進み、急速に工業化を遂げると人材不足が深刻になり、国内の高等教育を充実させる必要性が増し、1996年には私立高等教育機関法が発効した。それまで認められていなかった私立高等教育機関の設立が認可され、大部分を英語で行うプログラムが認められるようになった。欧米の大学との連携はさらに進み、民間の高等教育機関には、学位課程の一部もしくは全てをマレーシアで受けることで欧米の学位を取得できる、トゥイニングプログラムやフランチャイズプログラム、ダブル

ディグリープログラム等のトランスナショナル教育プログラムが数多く存在する。グローバル化の波の中で、高等教育の品質管理の発想が浸透し²⁰⁾、これらトランスナショナル教育プログラムは欧米の大学の認証を受けてマレーシアの高等教育機関が運営する上、マレーシア認証評価機構(Malaysian Qualifications Agency: MQA)の厳しい審査を経て²¹⁾。さらには欧米等の大学がマレーシアにキャンパスを設けるブランチキャンパス(分校)もマレーシアでは盛んであり、2020年時点で14大学が設置されている²²⁾。

以上のような背景から、高等教育を急速に拡大させたマレーシアは、すでに高等教育進学率が43.1%に達している²³⁾。それと同時に、欧米諸国の教育プログラムを安価に受けられる留学先として、外国人留学生からも人気を集めるようになった。2019年において、全高等教育機関の在籍者数に占める留学生の割合がマレーシアでは8.5%に及び、OECD平均の6.0%、日本の4.7%²⁴⁾を大きく引き離していることはあまり知られていない。

4 調査手法

4.1 調査参加者

筆者は2017年9月~2018年3月にかけて日本人正規留学生3名およびトライアンギュレーションのため大学職員1名に、ナラティブ・インタビューを実施した(表1参照)。日本人学生は、筆者が2016年~2017年に別の研究で調査対象とした、マレーシアで学ぶ主に後発途上国出身の留学生から紹介してもらうという、スノーボール・サンプリング形式をとった。

表1 調査参加者

種別	仮名	性別	留学先・所属先の大学
学生	レイコ	女	国立A大学院人文学系
	タカン	男	私立B大学経営学系
	ショウ	男	私立B大学経営学系
職員	ケイト	女	私立B大学広報担当

スノーボール・サンプリングは、目的的サンプリングの最も一般的な手法であり、「情報量豊かなケースを知っている人々を知っている人々」から、

適したインタビュー対象者を見つけていく方法である²⁵⁾。昨今のコロナ禍によって、より対象者を広げた調査を行う機会が阻まれているため、今後の広範囲な調査の手法や調査項目を検討するために、スノーボール・サンプリングで集めたデータをまずは分析することとした。スノーボール・サンプリングの問題点として、紹介してくれる人の属性や国籍等に偏った調査参加者が集まってしまうことが挙げられる。今回は、調査参加者を学位取得目的の日本人正規学生と限定していたため、的を絞って参加者の紹介を依頼できた。調査参加者のうちレイコについては、修士課程を5年以上かけて修了後、日本で就職を果たした後に、再度のインタビューを2021年1月に、オンラインにて補足的に実施した。

日本人学生とはお互いの母語である日本語で、大学職員とはお互いの共通言語である英語で、それぞれインタビューを行った。本文中にある大学職員の語りは、筆者が邦訳を行ったものである。日本人留学生については、インタビューを効率的に進めるために、自身の経歴や留学に関する基本的な情報、留学動機、留学経験等に関する質問票を送り、できる限り事前に回答してもらうようにした。ただしインタビューでは質問票の内容にこだわるのではなく、語りの流れを重視するようにした。総インタビュー時間は、調査参加者4名合わせて6時間7分であった。

調査参加者の所属大学のうちA大学は、マレーシアに5校ある研究大学の1校であり、留学生比率は10%を超えている。マレーシアの高等教育がエリート層のみに開かれていた50年以上前に創立された、歴史ある伝統校である。近年のQS世界大学ランキングでは200位以内に位置している。

B大学は前節で概観したトランスナショナル教育プログラムを多数実施する、民間高等教育機関である。B大学独自の学位プログラムも有するが、アメリカ、イギリス、オーストラリア等、欧米諸国の学位が取れるプログラムが人気である。マレーシアで3年間勉強することで海外の学位が取得できる「3+0」もあれば、1~2年間マレーシアで学んだ後に欧米の大学に移動する「2+1」「1+2」等のプログラムも有している。

B大学は日本を留学生獲得の主要なマーケットと

位置付けており、例年約30名もの日本人留学生を正規の学士課程に受け入れていることは、特筆すべきである。調査参加者のケイトは、広報及び日本人留学生を担当している。

調査参加学生は3名とも、学位取得のためにマレーシア留学をしている点は共通しているが、前述の平塚(1980)による類型に基づけば、レイコはマレーシアの歴史・文化に興味を持ち、マレー語研修を経て修士課程に留学しており、「地域研究型」留学生であると言えよう。一方、残りの2名は日本の高校を卒業後、日本や海外の大学を比較検討した結果マレーシアを選び、経営学等を学ぶため学士課程に入学した「学位取得型」である。

4.2 インタビュー手法と分析方法

本研究では、日本人留学生の語りを、留学先の選択から留学、そして職業への移行に至るまでの一つの物語として扱うため、ナラティブ・インタビューを実施した。ナラティブを体系化する最も基本的なアプローチとして、コルタジによるナラティブの構造(表2)がある²⁶⁾。ナラティブ・インタビューにおいては、いかにストーリーが体系化され、どのように展開され、どこで、どうやってナラティブが始まり、終わったのか、というナラティブの構造に注意を払う必要がある²⁷⁾。全てのナラティブに完全に規則的なカテゴリーがあるというわけではないが、この枠組みを用いることで、いかにナラティブが構造化されているかをつかむことができ、語りの役割を深く検討することができる。

表2 ナラティブの構造

構造	質問
要約	何についてか
方向性	誰が、いつ、何を、どこで
複雑化	その後、何が起こったか
評価	だからどうしたのか
結果	最後に何が起きたのか
締めくくり	(ナラティブの終了)

(出所) Cortazzi (1993) p. 45より筆者邦訳。

インタビューデータはSCATを用いて分析した。SCATは、インタビュー記録や観察記録等の言語データをセグメント化し、そのそれぞれに〈1〉デー

タの中の着目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法である²⁸⁾。この手法は、一つだけの事例のデータやアンケートの自由記述欄等、比較的小さな質的データの分析にも有効であるため、本研究に最適であると考え採用した。

5 調査結果

5.1 教育・研究の厳しさ

3名の日本人留学生が共通して語ったのは、マレーシアの大学の、教育または研究に対する厳しさである。学士課程においては、日本人に限らず留学生は全般的に、成績が足りないことによる在留資格取得継続の困難さを経験する。その背景には、教育の質保証に対するマレーシアの大学の真剣な取り組みがある。

「ビザが厳しくなった。昔は1回の申請で3年分取れたらしい。今は1年。どんどん基準も厳しくなって…留学生で来てドラッグやっちゃうとか、そういう子が多過ぎちゃって。日本人も結構それで。CGPA どれくらいとってないとビザ更新できないとかなって。帰らざるを得ないような。」(ショウ)

ケイトは、もうすぐ自身が担当した日本人留学生の第1期生が卒業すると話した。彼・彼女らの学業成績について尋ねると、「平均的。とても優れた学生もいるけれど、そうでもない子もいる。言語のせいでしょうね…でも、私が予想していたよりもよくやったと思う。」と表現した。

タカシは同じくケイトから、「日本人はすぐ(単位を)落とすし、帰っちゃうから。学部入る前のファウンデーションコースで。」と言われ、日本人の場合、高校を卒業してすぐに学士課程に入るのではなく、まずはファウンデーションコース(予備教育課程)に入るのが一般的ということを示されたという。タカシは結局、学士課程に直接入学すること

になったため、最初は英語で専門科目を学ぶことに苦労した。しかし、英語を学ぶだけでなく、英語を使って専門科目を学べることを、「でもまあおいしいっちゃおいしいっすよね。英語学びながら一応専門の知識も入るっていうのは、すごいおいしいなって。」と表現し、最初は苦労したものの、充実した学びを得ていることを伺わせた。

一方、修士課程に留学したレイコの場合、歴史学専攻ということもあり、指導教員からローカル言語(マレー語)による高水準な論文執筆を求められた。事前に語学研修は受けていたものの、論文執筆に至るまでの言語能力は習得できておらず戸惑ったという。論文のテーマ選びで苦労したことや、適切な校正者が見つからず、論文の水準を上げるのに時間がかかったこと等から、レイコは修士課程修了までに5年以上を要することとなった。

5.2 マレーシア留学の特性

タカシとショウからは、マレーシアをフィールドとした授業の醍醐味が語られた。例えばマーケティングの授業において、ヒジャブ(ムスリム女性用のベール)の会社を経営していると想定し、マーケットリサーチを行うケース・スタディ等である。友人に話を聞いたり、実際に商業施設に足を運んで価格帯を調べたりする等、マレーシアで勉強していることの特性が感じられると話した。ショウは特に、それまでの留学生生活を振り返り、マレーシアに留学したことの意味を以下のように語った。

「これだけアジアを感じられる。勝手にこの留学中に、なんだろう、*Asian Identity* みたいなのができちゃって。…これから先、何するにしても結構なんか、アジアを見て、アジアのためについての、ちょっと軸にしてやってこうかなとは思ってる。」

タカシは、経済成長が著しい新興国において、昔の日本の姿を見出すこともあり、違った見方ができると語った。またB大学においては、日本では出会うことのない北朝鮮出身の留学生と出会う機会があり、官僚の子弟等をはじめ優秀な学生も多く、イメージが変わったという貴重な経験も語られた。

さらにケイトは、B大学の特徴を以下のように表現している。

「ここはグローバルな教室です。85の国から2,500人も留学生が学んでいます。教室に行けば、マレーシア人だけじゃなく、ベトナム人のクラスメート、中国人のクラスメート。マレーシア人もいればカザフスタン人もいます。カザフスタンに行く代わりに、友人を作ることができるんですよ。」

一方、大学院に留学したレイコの場合は、旧英領植民地であり、教育制度がイギリスに準じているマレーシアの大学院の特徴である、講義主体型(Taught course)か研究主体型(Research course)のどちらかを選択する必要があった。講義主体型を選んだ場合、マレー語で定期試験を受け時間内に解答する等の負荷があると考え、研究主体型を選択したと語った。講義主体型でも修士論文は課されるが、量は半分程度でよく、審査もそこまで厳しくないという。一方、研究主体型の場合は、国際学会での2回以上の発表と、大学紀要等への掲載も課され、研究に集中する生活を送ることになる。

5.3 留学中の心理状態

レイコは質問票において、マレーシア生活を振り返って学習に関する満足度は5段階のうち真中の「どちらともいえない」、生活については最低評価の「非常に低い」と回答した。また、留学中に直面した困難として、勉強・研究・言語・ビザ・住居・食・文化の相違・人間関係・金銭的問題の全てを選択した。マレー語で修士論文を書くという困難さに加え、研究主体型を選んだため、必要習得単位数が少なく、歴史学と研究手法の2科目を履修した後は人との交流機会が減少した。さらには、マレーシア人の友人との金銭感覚の相違や「国民性だったら合わないなって思います。」と表現したマレーシア人の特性とを感じる点等、異文化における人間関係の悪化が論文執筆に悪影響を及ぼした。「最後まで慣れなかった。」という言葉が、カルチャーショックの長期的継続を表している。

しかしながらレイコは、修士課程の最終局面において、外国人留学生の修士論文執筆の苦勞を理解し

てくれる中華系教員と知り合うことができた。その教員自身もマレーシア人とはいえ、母語ではないマレー語で公的文書を書くことに苦勞しており、院生アシスタントに文書作成を依頼していた。このことから、同じ院生にレイコの修士論文の校正を頼んでくれたことが契機となり、論文の質が向上し、指導教員の了承を得て提出にこぎつけることができた。

一方の「学位取得型」留学の2名は、新興国学部留学にチャレンジするだけの進取の気性に富んでいた。ショウは質問票において、学習・生活面どちらも満足度は最高評価の「非常に高い」を選択した。「ビジネスの授業がめっちゃ面白いです。」と述べるとともに、イスラム教徒の学生とコミュニケーションが取れることを満足度が高い理由として挙げた。タカシは学習について満足度が「非常に高い」、生活について「高い」を選択していた。「満足度はまだ上がるんで。中国語とかマレー語とかできたらまた違ってくるし。」と、すでに高い満足度がさらに高まる可能性に言及した。2名とも、留学中に直面した困難として、勉強や言語、ビザを挙げた。前述のとおり勉学が厳しく、そのことによってビザ更新へのプレッシャーが強いことが伺えた。

5.4 欧米留学・日本における修学との比較軸

レイコの場合は、マレーシアの言語や歴史を学び、研究するという目的があったため、マレーシア以外の留学先は候補に挙がらなかった。タカシは、第一志望の日本の大学を不合格になったが、もともと海外留学の希望を持っていたため、滑り止めの国内大学に行くよりは、最初から学位取得のために渡航しようと留学を決めた。タカシが所属していた高校の国際系の学科では、同じクラスから他にも2名がマレーシアの学士課程に留学しており、マレーシアが特殊なルートではなかった。タカシとショウはどちらも、高校を卒業後、日本及びそれ以外の国々の大学の中からマレーシアを選択したため、常に自身の経験を他の国々(特に欧米諸国と日本)と比較する軸を有している。

中でもショウは、B大学の「2+1」制度を利用し、2年間はB大学で学び、残りの1年間をオーストラリアの大学へ編入することを希望していた。「自分みたいに編入考えてる人にとっても、2+1でマ

レーシア2年だと、オーストラリアで払うお金1年だけじゃないですか。」とトウニングプログラムのコスト面での利点を述べた上で、「ちょっとまあ、付いていけるかとか、英語大丈夫かとか、心配ではあるけど。」と語った。欧米諸国の大学から認証を受けたトランスナショナル教育プログラムをB大学で受け、編入が保証されているとはいっても、英語ネイティブの国に移って授業についていけるかどうか、不安をのぞかせた。タカシも、「僕はちょっと英語のなまりが気になるんで。アクセントとかも。」と、英語ネイティブではない国で、英語で学んでいることの懸念を口にした。

タカシはさらに、「教育の質を求めるなら欧米つてなりますよね。」と述べ、暗に欧米の教育が優れているという考えを示した。希望就職先についても、「業種はなんでもよくて、一番贅沢言ったら、コンサルとかでビジネス全体の流れを学べるかなつて。行きたいんですけど。実際そこはアメリカとか留学してる人に奪われていっちゃうんじゃないか。」と、希望業種への就職には、アメリカ留学組のほうが有利であるという考えを示唆した。

また、これまで見たように、新興国での学部留学を選んだタカシとショウは共に、厳しい勉学に邁進し、刺激的で満足度の高い日々を送っている。しかしながら、「なかなか日本人の高校のやつ（高校時代の友人）と話してても理解してもらえない。」（ショウ）「話が合わない。留学してるやつとも。アメリカすげーしか言わない。僕もアメリカ行ったら同じことやったかもしれないけど。」（タカシ）と、どちらも日本の旧友や、アメリカに留学した友人と話が合わなくなっていることに触れた。

5.5 教育から職業への移行

ただ一人、すでに就職を果たしたレイコは、留学終了後に最初に就職した職場を短期間で辞めることになった経緯や、その後に経験した転職活動を「ものすごく辛かった。」と振り返った。しかしながら、マレーシアでの修士課程を、様々な困難に打ち克ち、長期間かけて修了したことと対比し、就職活動の困難を乗り越えた経験を以下のように語った。

「私って本当にどうしようもない人間なのかなつ

てちょっと思ったんですけど、その時に。でもやっぱりその留学してた時のこと思い出したら、大丈夫だという風に思いましたね。うん、不安は不安だったんですけど、ちゃんと次に向けてやったら、うん、あんなに色んな事やってきたから、ここでなんかもう、私はダメなんだと思って何もやらないうって選択肢は取らずに済んだかなつていうのは思いますね。」

これから就職活動をするタカシとショウにとっては、日本、マレーシア、それ以外の国々全てに可能性が広がっている。タカシは「日本で働きたいです。日本式マネジメントとか（授業で）出てきて。特殊な環境だと思うんですよ、日本って。それについては身を持って学びたい。」と述べ、マレーシアに留学することによって、日本式経営を外から再発見し、日本人であることを利点ととらえて日本式経営への参加意欲を示した。

しかし、日本ではその名が知られていない新興国の大学から一般企業に就職すること、そしてそもそも、学士課程留学者が日本式の新卒一括採用に参加するには、高い障壁がある。ショウは筆者に対し、「マレーシアの大学を卒業した人が、日本の大学卒業した人と、日本企業って同じ舞台上で勝負するのはいいと思いますか？マレーシアの大学出た人はdisadvantageだと思うんですよ。同じように日本企業にアタックしてくのってどう思います？」と逆に疑問を投げ掛けた。ショウは起業への意欲が高く、B大学経営学系の中でも、起業コースに属している。「最終的には自分のお金は自分で作っていきたいと思ってるんで。マネジメントに携われたら、会社の直接的な力になれば、やりがいがある。中国とかでも働いてみたい。」さらに「マレーシアに来たからには、マレーシアで働いた経験も実はほしい。」と、様々な国で就労経験を積む意欲を見せた。一方のタカシは、マレーシアの高等教育レベルの高さへの自負から、就職活動における、日本のトップ大学生への挑戦をも掲げた。「俺は入りたい。日本の大学生と戦いたい。違う土俵から。目指すは東大の人と戦いたい。だから海外の大学行ってん。日本のやり方に沿って、日本の面接行って勝ち取りたいなって感じ。」と自信を見せた。

6 考察

6.1 国際的な学びの促進

そもそも欧米の大学への留学は選択肢になかったレイコ、最初からアジアを希望したショウ、日本の滑り止めの大学よりはマレーシアの大学への直接入学を選択したタカシにとって、留学した動機は先行研究で見られたような欧米留学の妥協からではなかった。また、3人の中から「日本の大学(院)に行っていればよかった。」という趣旨の語りはなかった。少ない人数のインタビュー結果ではあるが、先行研究における先進国への学位取得留学で見られたような、現実逃避的な語りは見られなかった。初回インタビュー時の質問票調査で、主に人間関係の葛藤から低い満足度を示したレイコも、その困難を乗り越えた経験を糧に日本での就職活動を乗り切る等、前向きであった。

欧米留学の譲歩・妥協や日本社会からの現実逃避ではなく、積極的に選び取ったマレーシア留学で、勉強・研究および日常生活を含め、3人は何を達成することができたのだろうか。「地域研究型」のレイコは、勉強・研究の内容そのものがマレーシアでしか得られないものであり、マレーシア留学の特徴を享受したのは間違いない。しかも研究主体型コースは習得科目数が少なく、国際学会発表や論文投稿・掲載が求められ、日本でいえば博士課程のような形態である。マレー語の校正者探しの苦労は、英語以外の外国語で修士論文を執筆することによる、マレーシアならではの経験と言えよう。「学位取得型」の2名のインタビュー結果からは、アジア軸の確立、日本の昔の姿が見出せる希少性、国際関係観の変容等、マレーシアに留学したことの特徴が強く浮かび上がっている。

さらに詳細に3名の日本人留学生の語りを振り返ると、同じマレーシアに学位取得のために留学しながらも、その経験は大きく異なっていた。もちろん学士課程と修士課程の違い、それ以上に個々人の性格等の特性に由来する違いは大きいと推察される。ただ、最も際立った差異のうちの一つとして考えられるのは、タカシとショウは、英語を教授言語とする民間高等教育機関の、欧米の大学への接続機会も残されるトランスナショナル教育プログラムで学んでおり、一方のレイコは、マレー語で研究・生活の

大部分が完結する生活を送っていたことである。

主にマレー系、中華系、インド系からなる多民族国家のマレーシアでは、各エスニック・グループが独自の文化・言語を有しており、熾烈な競争状態にある民間の高等教育では、しばしばエスニック間の駆け引きが先鋭に表れる²⁰⁾ ことが、この相違の背景にある。杉村(2017)は、もともと「複合社会」であるマレーシアに、さらに留学生や外国人労働者が大量に流入することによって、二重の「複合社会」が形成されていることを指摘している²⁹⁾。まさに、マイノリティである中華系やインド系が、教育機会を求めて切り開いてきた民間の高等教育機関において、いわば英語世界での生活を送るタカシ・ショウと、国立大学においてマレー語世界に生きるレイコの留学生活は、この「複合社会」を表象していると言える。

杉村(2017)は、マレーシア国民と留学生・外国人労働者との間の不平等、断片化の促進という負の側面に焦点を当てた²⁹⁾。確かにアフリカ系留学生への差別³⁰⁾等、負の側面はあるものの、本研究では、所属する課程や性別、性格の違いにかかわらず、この二重の「複合社会」によって、「グローバルな教室」等、国際的な学びの促進という、国際教育にとっては肯定的な側面もたらされている点をとらえることができた。

6.2 欧米への従属を超えて

ネイティブ英語が正当であるという考え方や、欧米留学組への劣等的意識、また、欧米留学者との認識の相違に対する無念さ等、「学位取得型」の日本人留学生個人からは、常に欧米留学に対する従属的な意識が垣間見られた。そもそも、世界の高等教育はほとんどが欧米型の大学をモデルとし²⁾、日本の大学も明治から現在に至るまで欧米の先進的な知識や科学技術を学生に移転することを役割としてきた³¹⁾。言語的にも、大学システムから教員に至るまで、英語や英語を使った学術の優位性や覇権性がある³²⁾ ことが、学生の従属的な意識の背景にあらう。

高等教育機関のレベルでは、すでに先進的なアジアのいくつかの大学は、これまでの一方的な欧米諸国の大学への従属関係を脱し、自立の道を歩み始めている³³⁾ とされる。その一方で、近年増加する、

英語での教育プログラム実施によって新たな従属性が生まれ、英語の教授言語化に伴う、「支配」-「従属」の再生産も懸念されている³²⁾。この流れが、上で見た個人の従属的意識をさらに加速させる可能性もある。

マレーシアは旧英領植民地であり、教育システムが英国に準じ、英語が広く社会に普及していることを逆手にとって、トランスナショナル教育プログラムをむしろ積極的に推進している。マレーシアは、まさに嶋内(2016)のいう、「グローバル経済での生き残りといった実利的な目的のために、グローバルな伝達手段としての英語を必要としている」ポスト植民地主義下の国々³⁴⁾ であると言える。しかしながら、欧米に準ずることで、長年マイノリティ学生に寄与してきた歴史を有する点は、他の旧植民地国家とは大きく異なる状況であろう。さらには同じ論理で主に他の開発途上国から留学生を集め、母国での教育機会が限られる多様な人々に教育アクセスを提供してきた。

本研究で明らかになったのは、その中でもマレーシアの特色を出しつつある高等教育の現状である。先行研究でも、熱帯病やハラール食品、ハラールワクチン、イスラム金融等、マレーシアが優位性を持つ研究分野は指摘されてきた³⁵⁾ が、本研究ではさらに、アジア軸の確立やグローバルな教室という新たな視点も見いだされた。多民族国家である上に、欧米主要受け入れ国をも凌ぐ割合で、アジアを中心とした留学生を多数受け入れているマレーシアならではの特色であると言えよう。今後はその独自性によって、先進国からも学生を引き付ける可能性が示唆される。

6.3 職業への移行の展望

先行研究では、日本の新卒一括採用において、海外留学が不利に働く面があるため、労働市場でキャリアパスが約束された高学歴層（特に男性）は国内にとどまり³⁶⁾、逆に学力不足への後悔・コンプレックスが若者を海外に駆り立てること³⁷⁾ が指摘されている。

本研究では実際に、どの調査参加者も就職活動については不安や葛藤を抱えていた。特に日本の新卒一括採用に参加しようとする不利であるという認

識を持つ上、欧米留学組への劣等的意識も見られた。実際にマレーシアで学位を取得した日本人がどのような職に就いていくのかは、その業種、職種、規模、そして働く国も含め、今後より多くの留学生を追跡していかなければ分からない。日本の採用慣行に乗らず、起業や国を選ばない職探し、または専門職採用を行う企業に就職するなどすれば、マレーシア留学の付加価値が生きてくる可能性がある。

ただ、修士課程修了に長い時間をかけたレイコが、その帰国後、新卒扱いにはならないにもかかわらず、辛い就職・転職活動を経て希望の職に就けたことを考えると、就職については個々人に依拠するところも多いと考えられる。

7 結論

学位取得のためマレーシアに渡った者たちへのナラティブ・インタビューからは、先行研究で挙げられた、現実逃避やドロップアウトといった類型とは異なる日本人留学生の姿が浮かび上がった。今回の数少ないサンプル数では、マレーシアへ留学した日本人留学生の類型化にまでは至らないが、欧米留学組とは異なる新たな潮流が生まれていることは、これまで見てきたマレーシア留学の特徴、欧米の教育に対する従属の認識、異なる言語世界の存在、職業への移行の展望等から明らかである。

本研究は、先進国から新興国へキャリアや人生をかけ、学位取得を目的に渡るといった新たな留学生移動を検証することによって、「中心」的な国から「周辺」的な国への国際留学生移動という新たなパラダイムを提示するとともに、高校生・大学生にとってマレーシアへの学位取得留学という、国際的な学びを促進する新たな選択肢を示すものとなる。今後マレーシアのような国が、日本人の留学先という意味と同時に、留学生受け入れ国日本の競合相手という意味でも、新たな留学先の選択肢として浮上してくると考えられる。特に昨今のコロナ禍において、中間層出身の子どもが非英語圏から英語圏に留学するという従来型の留学モデル^{17, 38)} では以前ほど留学生を集められなくなり、安価な学費・生活費という強みを持つマレーシアが、留学先としてさらに存在感を増していく可能性がある。日本人にとっても欧米留学がコスト的に厳しくなり、マレーシアのよう

な新興国が有力な留学先となる余地は大きい。

本研究には課題も残されている。まず、調査参加者が日本人留学生3名と大学担当者1名ということで人数が非常に限られ、本研究結果を一般化することは難しい。人数を増やせば当然、様々なタイプの学生が含まれ、中には現実逃避タイプや欧米留学の譲歩型も入ってくるであろう。ただ、今回明らかになったマレーシア留学の特徴は、まぎれもなく現時点でマレーシアに留学する日本人留学生の視点から浮かび上がったものであり、ダイナミックに変化を続ける国際留学生移動の一端を映し出している。

本研究では、少ない留学生数ながらも「学位取得型」と「地域研究型」という違った属性を含むことができ、留学生受け入れ担当者という、留学生以外の視点を取り入れることができた。しかしながら、より人数や大学の属性を広げ、事象の一般化ができるよう今後は努めていきたい。具体的には、国私立を含む複数の大学の担当者またはマレーシア日本人学生会 (Japanese Student Association in Malaysia: JSAM) 等を通じた日本人留学生へのアクセスを試み、質問紙調査を行った上で、インタビュー調査を行うことが考えられる。留学生活を受けた職業への移行にかかる部分により焦点を移し、キャリアに対する考え方が形成される過程について、進路に関する情報の収集方法、マレーシア残留・日本への帰国もしくは第三国への移動という決定に影響する要因、マレーシアで学んだことの活用等について調査していきたい。

さらには留学終了後の職業への移行を解明していくにあたり、マレーシアの大学を卒業した後の就職後の追跡を行っていく必要がある。本研究では地域研究型の1名のみ、留学終了後の進路も追うことができたが、今後、日本企業のグローバル化や通年採用の広がりにより、日本での就職にも変化が起こる可能性がある。元留学生の受け入れ側（企業等）の視点を取り入れることも、多面的に事象をとらえる上で重要になろう。ダイナミックな国際留学生移動を理解するためには、帰国者だけでなくマレーシアで就職した者、第三国へ移動した者等、多様な進路を追っていく必要がある。

謝辞

匿名の査読者2名の先生方には、貴重なコメント・ご指摘をいただいた。また本研究は、JSPS 科研費19K14124の助成を受けたものである。心から感謝申し上げたい。

注

- [1] マレーシア高等教育省は毎年、国立大学と私立大学を区分してデータを公表している。私立大学については上位30位までの留学生出身国を記載しているものの、国立大学は10位までにとどまっており、この中に日本は含まれていない。このため、マレーシア全体で日本人留学生が何名学んでおり、出身国の何位に位置するか情報は得られない。
- [2] アルトバック(1994)の「中心-周辺」論では、日本の主要大学は「周辺」から「中心」に移動し不平等から脱却した数少ない事例として扱われている。しかし日本語が国際語ではないので、国際的な中心大学には位置づけられていない。マレーシアの大学が英語を媒介として、将来的に世界の主要国から留学生を集める可能性も見込んで、本研究では日本からマレーシアへの学位取得留学を「中心-周辺」論に位置付けた。
- [3] 民間の高等教育機関は、国立大学・私立大学の区別においては私立大学に含まれる。マレーシアにおいて、いわゆる「私立大学（設立当初から University の資格を付与された大学）」は、政府系企業や政党傘下の機関、もしくは外国大学のブランチキャンパスである。吉野(2014)が、国が管理・運営する「公」の高等教育に対置して、(主に中華系・インド系のマイノリティに対する) 機会の開放を試行錯誤する対象として「民間」を用いたのに倣い、本研究でもカレッジからユニバーシティカレッジや大学に昇格したような機関には「民間高等教育機関」の用語を用いる。ただし、文脈に応じてそれらの機関を「私立大学」と呼ぶこともある。

引用・参考文献

- 1) UNESCO Institute for Statistics. (2012). *Global education digest 2012: Opportunities lost: The impact of grade repetition and early school leaving*. Quebec: UNESCO.

- 2) アルトバック, P. G. 著, 馬越徹監訳. (1994). 比較高等教育論—「知」の世界システムと大学. 玉川大学出版部.
- 3) UNESCO Institute for Statistics. (2006). *Global education digest 2006: Comparing education statistics across the world*. Quebec: UNESCO.
- 4) UNESCO Institute for Statistics. (2019). *Global flow of tertiary-level students*. <http://uis.unesco.org/en/uis-student-flow> (2021年3月4日参照)
- 5) Ministry of Higher Education, Malaysia. (2019). *Higher education statistics 2019*. <https://www.mohe.gov.my/muat-turun/awam/statistik/2019-1> (2021年3月4日参照)
- 6) 平塚益徳. (1980). 世界教育事典. ぎょうせい.
- 7) 権藤与志夫. (1991). 世界の留学—現状と課題. 東信堂.
- 8) 日本学生支援機構. (2018). 日本人学生留学状況調査結果 <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/data/2018.html> (2021年3月4日参照)
- 9) 横田雅弘, 小林明編. (2013). 大学の国際化と日本人学生の国際志向性. 学文社.
- 10) 横田雅弘, 太田浩, 新見有紀子編. (2018). 海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト: 大規模調査による留学の効果測定. 学文社.
- 11) 小柳志津. (2002). 留学大衆化のなかの在豪日本人留学生: 留学動機と成果を中心に. 留学生教育, 7, 27–38.
- 12) Andressen, C. & Kumagai, K. (1996). *Escape from affluence: Japanese students in Australia*. Brisbane: Centre for the Study of Australia–Asia Relations.
- 13) 星野晶成. (2015). 日本人大学生の東南アジア留学の現状とその特徴—JASSO統計から見えてくるもの—. 留学交流, 47, 31–47.
- 14) Murphy-Lejeune, E. (2002). *Student mobility and narrative in Europe: The new strangers*. Oxon: Routledge.
- 15) Baas, M. (2006). Student of migration: Indian overseas students and the question of permanent residency, *People and Place*, 14(1), 9–24.
- 16) Baas, M. (2007). The language of migration: The education industry versus the migration industry, *People and Place*, 15(2), 49–60.
- 17) Robertson, S. (2013). *Transnational student-migrants and the state: The education-migration nexus*. New York: Palgrave Macmillan.
- 18) 金子聖子. (2018). 新興国で学ぶ留学生の大学から職業への移行—留学生の新たな移動に着目して. 比較教育学研究, 56, 23–45.
- 19) Furnivall, J. S. (1939). *Netherlands India: A study of plural economy*. London: Cambridge University Press.
- 20) 吉野耕作. (2014). 英語化するアジア: トランスナショナルな高等教育モデルとその波及. 名古屋大学出版.
- 21) Tham, S. Y. (2010). Trade in higher education services in Malaysia: Key policy challenges, *Higher Education Policy*, 23, 99–122.
- 22) Cross-Border Education Research Team. (2020). *C-BERT International Campus Listing*. [Data originally collected by Kevin Kinser and Jason E. Lane]. <http://cbert.org/resources-data/intl-campus/> (2021年3月4日参照)
- 23) UNESCO Institute for Statistics. (2019). *Gross enrolment ratio of tertiary education, Malaysia*. <http://uis.unesco.org/country/MY> (2021年3月4日参照)
- 24) OECD. (2020). *Education at a glance 2020: OECD indicators*. OECD Publishing.
- 25) メリアム, S. B. (著) 堀薫夫・久保真人・成島美弥. (2004). 質的調査法入門: 教育における調査法とケース・スタディ. ミネルヴァ書房.
- 26) Cortazzi, M. (1993). *Narrative analysis*. London: Falmer Press.
- 27) Coffey, A. (1996). *Making sense of qualitative data: Complimentary research strategies*. London: Sage Publications.
- 28) 大谷 尚. (2019). 質的研究の考え方: 研究方法論からSCATによる分析まで. 名古屋大学出版会.
- 29) 杉村美紀. (2017). 移動する人々と国民国家—ポスト・グローバル化時代における市民社会の変容. 赤石書店.
- 30) Daniels, T. P. (2014). African international students in Klang Valley: Colonial legacies,

- postcolonial racialization, and sub-citizenship, *Citizenship Studies*, 18(8), 855–870.
- 31) 太田 浩. (2011). 大学国際化の動向及び日本の現状と課題: 東アジアとの比較から. *メディア教育研究*, 8(1), 1–12.
- 32) 嶋内佐絵. (2016). 東アジアにおける留学移動のパラダイム転換—大学国際化と「英語プログラム」の日韓比較. 東信堂.
- 33) 馬越 徹. (2007). 比較教育学—越境のレッスン. 東信堂.
- 34) 嶋内, 前掲書, 81頁.
- 35) Day, N. & Muhammad, A. B. (2011). *Malaysia: The atlas of Islamic-world science and innovation country case study no. 1*. London: Royal Society of London for Promoting National Knowledge.
- 36) Yonezawa, A. (2014). Japan's challenge of fostering global human resources: Policy debates and practices, *Japan Labor Review*, 11(2), 37–52.
- 37) 加藤恵津子, 久木元真吾. (2016). グローバル人材とは誰か—若者の海外経験の意味を問う—. 青弓社.
- 38) Larsen, K. & Vincent-Lancrin, S. (2002). International trade in educational services: Good or bad? *Higher Education Management and Policy*, 14(3), 9–45.

受付日 2021年3月10日、受理日 2021年5月15日